

灯台



反差別、人権豊かな職場（労組）づくりを！

Fさんは若い時入所していた。退所して、電気工事の労働者のあと建設会社に入社した。万博の会場づくりの労働もした。結婚はしなかった。自分の過去を隠したがうまくいかなかった。建設会社を定年で退職。後は高齢化に伴い、両手先が曲り、友人に問われ「リユウマチかな」とこまかした。昨年風邪をこじらせ、救急車で入院。老後のことを心配し地元などの老人ホーム入居などを考えたが、根掘り葉掘り過去を聞かれたらと心配して、遠い方が誰も会いに来ないだろうと、「群馬県の老人ホームに入る」と嘘をつき、栗生楽泉園に入所することにした。再入所。「まだ住所が決まってない。入居したらハガキですよ」と嘘を言って親しい知人たちと別れた。今までの人的なつながりが全て断絶した。(2019・11・16「毎日新聞」)

本当のことを語れない社会をつくったのは、何か、誰か？ F

さんはハンセン病患者である。自分のこと、自分の家族のことなど本当のことを語れば労働・生活上の不利益を被る「人生被害」から、隠し嘘をつき続ける人々がいる。被差別部落の人や在日朝鮮人も。私たち労働者は、職場に、ほんとうの自分を語れない労働者がいたらどうするか？ いや気づかずにいる。

今日の新自由主義(資本主義)は、激しい競争と能力主義により、労働現場に、競争と差別、超勤と多忙、管理強化とパワーの嵐が吹き荒れている。労働組合は競争差別を排し、協力助け合い、反差別の人権豊かな職場づくりも任務としている。三池闘争など先輩の闘いに学びながら、当局の差別政策・攻撃と闘い、自らの差別性(差別と無関心)も問いつつ、真実を語り合い、助け合いの出来る職場ぐるみ、家族ぐるみの運動を職場からつくろう。団結の質が問われている。